毛利藩主国廻り時の休泊に用いられた御茶屋について

毛利藩主国廻り資料に見られる休泊施設 (その1)

OCHA-YA USED BY THE LORD OF MOURI-HAN IN EDO ERA Lodgings in materials on the tour of inspection by the lord of Mouri-han Part 1

岡田 悟*

Satoru OKADA

The lord of Mouri-Han sometimes made the tour of inspection in Edo era. Through the examination of historical materials on these tours, the following results are ascertained.

(1) Lodgings called Ocha-ya were used by lord.

(2) There were two kinds of Ocha-ya: the permanent lodging which had a original architectural composition and the temporary lodging which was primarily a temple or farmhouse.

Keywords: Ocha-ya, lodging, lord, Mouri-han, tour of inspection
御茶屋, 休泊施設, 大名, 毛利藩, 巡視旅行

1. はじめに

毛利藩内の武士休泊施設として、すでに、三田尻御茶屋、宮市宿本陣兄部家に関する研究結果を発表した(文献1、2)。これらは、個々の施設を対象として、遺構を中心に建築形態や各部分の使われ方等を検討したものであり、従来も建築史の研究手法として数多く用いられてきた手法と言える。更に、このような成果を集成しひとつの街道に沿う各宿駅の施設を総覧した研究(文献3)も見られる。一方、武士が休泊を続けて移動することにより形成される旅行に着目し、ひとつの旅行においてどのような施設が休泊に用いられたか、を検討する方法もある。これは主に交通史の立場からの研究が進んでいる(文献4)が、具体的な建築形態等にまで及んだ研究は、拙稿(文献5)を含めて数少ない。

休泊を伴う武士の旅行形態としては、まず、大名の参勤交代による江戸と在地との往復が、近世を代表するものとして挙げられる。また、地方知行制を採る藩で藩内の在地に居館を構える上級家臣も、同様に大名居城のあ

る城下町と在地との間を往復していた(文献5)。この他に、将軍の上洛・日光社参や巡見使・上使・遠国奉行等の幕吏の通行等あり、さらには、非公式な湯治のための旅行やより下級の武士による通行も考えられよう。このように、近世においては多様な武士の移動が行われていたことが知られる。

今回採りあげる毛利藩における国廻りは、姻戚関係にある岩国、徳山、長府、清末の4支藩を含むものの、藩主による公式な藩内旅行と分類され、この国廻りにおいて藩主に利用された休泊施設を検討してみたい。本稿ではその1としてそれら施設の内、御茶屋と呼ばれるものを対象として、前2稿(文献1、2)で得られた知見を併せ用いながら、建築の実態を明らかにしたい。ただし、資料面での制約から、平面構成の検討を中心に進めることとなろう。なお、その2以降では御茶屋以外の施設を対象に同様の考察を行う予定である。

* 共立女子短期大学生活科学科 講師・工博

Lecturer, Dept. of the Science of Living, Kyoritsu Women's Junior College, Dr. Eng.

表1 国廻り史料

毛利文庫での分類番号と標題		史料に直接書かれている標題	内容（一部）			史料 No
			目次	日記風記述	日程表（施設名称）	
六-2	吉就様初御入国御国廻り一卷、貞享元（1冊）	同左	ナシ	アリ	御泊付（ナシ）	1
六-5	御国廻り、元禄九（1冊）	同左	ナシ	アリ	御泊附（ナシ）	2
六-10	吉元公初御入国御国廻り一卷、宝永五（2冊）	同左	目録（1～23）	道中之事	御宿付之事（ナシ）	3
六-28	宗広公御国廻記録、寛保二（5冊）	宗広公御国廻岩国記録（1冊）	ナシ	アリ（準備を含む）	ナシ	4
		宗広公御国廻長府清末記録（2冊）	ナシ	アリ（準備を含む）	ナシ	5
		宗広公御国廻惣記録下（2冊）	目録（17～33）	ナシ	御宿附之事（アリ）	6
六-29	宗広公御国廻須佐阿川記録、寛保二（1冊）	同左	ナシ	アリ（準備を含む）	ナシ	7

2. 毛利藩主国廻りとその資料

毛利藩の藩主国廻りは、原則として藩主の初入国直後に、支藩域を含めて領内を巡視する慣例的行事である。同様の行事は他藩においても見られ(*注1)、また、将軍代替わり時に名代として巡見使を全国に派遣することにも比定されよう。しかし、巡見使がほぼ藩政期を通じて派遣されたのに対し、毛利藩主の国廻りは初代秀就の慶長17年に始まり6代宗広を最後にそれ以降は廃止されている(*注2)。

これらの国廻りの内、3代吉就(貞享元年、1684)、4代吉広(元禄9年、1696)、5代吉元(宝永5年、1708)、6代宗広(寛保2年、1742)の4回については、日程、休泊地、休泊施設等の移動の様子を詳しく知り得る史料(表1、山口県文書館蔵)が遺されている。これらによれば、4回の国廻りはいずれも道順、日数がほぼ共通し、しかも、必ず9月中旬に萩を発ち10月初旬に帰城している等、極めて定型化していた様子が知られる。

毛利文庫目録で5題に分類されるこれら史料は、史料に直接書かれている標題と内容から、実質的に7編であることが理解され、本稿での引用のため表1に示すように仮に史料1~7と呼ぶこととする。内容の構成が最も分かり易いのが史料3である。即ち、まず、目次である「目録」に23項目が書き上げられ、第1の「道中之事」では出発から帰城までの様子が時間順に日記の体裁で書かれ、これが全体の半分近くを占める。後半には行列の隊形を記す「御備附之事」、日程表である「御宿附之事」

等が記されているが、この日程表には休泊地名は記されているものの、施設名は記入されていない。史料1、2は、目次や「道中之事」に対応するタイトルを欠き、また、日程表の名称が異なるが、内容は同一である。

史料6もこれらと同様のものと考えられるが、直接書かれた標題に「御国廻惣記録下」とあること、目録が「十七御宿附之事」から始まって第33項までであること等から推して、全行程についての「道中之事」に相当する部分を含む前半の「御国廻惣記録上」が同時に存在し、後に散逸したものと判断されよう。また、史料6の「御宿附之事」には、史料1~3と異なって、休泊地名に加えて休泊施設名も記されている。

以上の史料1、2、3、6はいずれも本藩である毛利藩の記録であり、言わば、国廻りを実行する側の記録である。これに対し、史料4、5の標題に見られる岩国、長府、清末は4支藩の内の3藩の名称であり、本藩藩主を迎える側と言えよう。残る徳山藩についても同様の記録があったものと推定されるが、現在発見されていない。また、本藩内でも、永代家老八家は1万石前後の一円的な知行地を拝領して藩中藩をなすが如き体制を採っていたが、史料7の標題に見られる須佐、阿川はそれぞれ八家の内の益田越中、毛利宮内の在郷屋敷を中心とする集落であった。これら3史料には自領内を藩主が通過した期間の「道中之事」に相当する記述の他、半年以上も前から国廻りに備えて行った用意の様子も記されている。

史料全体を見ると、回を重ねるに従って、記録の体裁が整えられ、内容も詳細かつ多面的になってゆく過程が認められる。

また、『御国廻御行程記』と題する絵図(山口県文書館蔵、以後国廻行程記と略称する)が遺されている。これは藩の絵図方雇有馬喜惣太が6代宗広の国廻りに際し、寛保2年に作成したもので、同年の国廻りの行程に従って、山々は道を行きながら左右を眺めるかのように鳥瞰図的に描かれ、また、道筋の曲がり、坂、橋、番所、高札場等が細かく表現され、交通環境、集落の状況を知ることが出来る(文献6)。これには本陣、御茶屋等も書き込まれ、作成の経緯からして、寛保2年の国廻り時の

表2 国廻り時の休泊地・休泊施設名

藩名	地名	A. 3代吉就、貞享元(1684) 史料1	B. 4代吉広、元禄9(1696) 史料2	C. 5代吉元、宝永5(1708) 史料3	D. 6代宗広、寛保2(1742) 史料6	E. 国廻行程記の 書き込み	F. 差図の標題 () 内Noは☆1参照
徳山	1奈古	01屋：御茶屋	01屋：御茶屋	01屋：御茶屋	01屋：徳山領御茶屋	御本陣	御茶屋(744)
	2宇田	01泊：御本陣ハ庄屋神吉所也	01泊：御本陣、庄屋甚左衛門	01泊：御本陣ハ神吉	01泊：御宿主金子神吉	御本陣	御本陣金子神吉所(745)
	3須佐	02屋：越中他屋	02屋：越中他屋	02屋：越中他屋	02屋：越中田屋	御本陣	御本陣田越中(747)
	4江崎	02泊：御本陣ハ酒屋忠右衛門所也	02泊：御本陣、教専寺	02泊：御本陣ハ真宗教専寺也	02泊：御宿主真宗教専寺	御本陣	御本陣教専寺(749)
	5弥富	03泊：御本陣ハ百生平七家也	03屋：御本陣庄屋有田善右衛門所	03屋：御本陣、庄屋有田治口門	03屋：御宿主有田善左衛門	御本陣	御本陣有田善右衛門所(748)
	6嘉年	04泊：御本陣、椿勘左衛門	03泊：御本陣、庄屋孫左衛門	03泊：御本陣、庄ヤ金子孫左衛門	03泊：御宿主波多野孫七	御本陣	御本陣波多野孫七所(750)
	7徳佐	04泊：御本陣、椿勘左衛門	04泊：御本陣、椿勘左衛門	04泊：御本陣、椿勘左衛門	04泊：御宿主椿九兵衛	御本陣	御本陣椿九兵衛所(751)
	8柚木	05屋：御本陣、伊藤市兵衛	05屋：御本陣、岩崎長右衛門	05屋：御本陣、岩崎長右衛門	05屋：御宿主河川与左衛門	御本陣	御本陣河川与左衛門所(762)
	9鹿野	05泊：漢陽寺	05泊：御本陣、岩崎長右衛門	05泊：御本陣、漢陽寺	05夜：御宿主神宗漢陽寺	御本陣	御本陣漢陽寺(670)
	10宮ノ原	06泊：御本陣ハ庄屋仁庵所	06泊：御本陣庄屋時高九郎左衛門所	06屋：御本陣、庄屋之宅	06屋：徳山領御茶屋	御本陣(☆5)	御茶屋(669)
徳山	11江崎	07泊：御本陣ハ山代勘場也	06泊：御本陣、庄屋四郎衛門	06泊：御本陣、御庄屋隅四郎右衛門	06泊：御宿主陣員六	御本陣	御本陣隅員六所(657)
	12山代本郷	08屋：御本陣ハ庄ヤ与左衛門所也	07泊：御本陣ハ勘場也	07泊：御本陣ハ御茶屋	07泊：御茶屋	御茶屋	御茶屋(656)
	13志部前	08泊：内蔵殿宅(☆2)	08屋：御本陣庄屋所	08屋：御本陣ハ民屋ニテ	08屋：岩国茶屋	御本陣	御本陣(652)
	14岩国	09屋：受徳寺	08泊：勝之助殿屋敷(☆3)	08泊：吉川勝之助殿宅(☆3)	08泊：屋敷	屋敷	御泊岩国屋敷(651)
	15高森	09泊：御本陣彼所之御茶屋也	09泊：御本陣、受徳寺	09泊：御本陣ハ受光寺	09屋：御宿主相川市郎左衛門	御本陣	御本陣相川市郎右衛門所(653)
	16花岡	10屋：土居	10泊：土居	10屋：御茶屋	09泊：御茶屋	御茶屋	御泊御館(664)
	17徳山	10泊11泊：御茶屋	11泊12泊：御茶屋	10泊：御館	10屋：御館	御館	御茶屋(677)
	18三田尻	12屋：御茶屋	12屋：御茶屋	10泊：御茶屋	10泊：御茶屋	御茶屋	御茶屋(696)
	19小郡	12泊：御茶屋	13泊：御茶屋	11泊：御茶屋	11泊12泊：御茶屋	御茶屋	御茶屋(712)
	20船木	13泊：御茶屋	13泊：御茶屋	12泊13泊：御茶屋	13屋：御茶屋	御茶屋	御泊御館(714)
清末	21吉田	14屋：屋敷	14泊：御茶屋	14屋：御茶屋	13泊：御茶屋	御茶屋	御泊御館(715)
	22清末	14屋：屋敷	15屋：屋敷	14泊15泊：御屋敷	14屋：御館	館	御本陣佐甲三郎左衛門所(716)
	23長府	14泊：阿弥陀寺	15泊：御本陣、阿弥陀寺	15屋：御本陣、阿弥陀寺	15泊：御宿主佐甲三郎左衛門	御本陣	
	24赤間関	15屋：御本陣	15屋：御本陣	16屋：御本陣、庄屋治兵衛所	16泊：御宿主神宗妙晴寺	御本陣	御本陣神宗妙晴寺
	25福江	15泊：御本陣	16泊：御本陣	16泊：御本陣甲斐守椿御茶屋(☆4)	16泊：御宿主神宗妙晴寺	御本陣	御本陣(☆6)
	26川棚	16屋：御本陣	17屋：御本陣、梅翁寺	17屋：御本陣、庄屋市之允宅	17屋：御茶屋	御本陣	御泊毛利宮内田屋(718)
	27宇賀	16泊：御本陣	17泊：御本陣、梅翁寺	17泊：御本陣、梅翁寺	17泊：毛利宮内田屋	御本陣	御本陣毛利宮内田屋(713)
	28阿川	17泊18泊19泊：御宿主や入江孫兵衛	17泊：御本陣、梅翁寺	18屋：御本陣、久保平左衛門宅	18屋：御宿主久保平左衛門	御本陣	御本陣寺戸助右衛門所(720)
	29井上	20泊：御本陣長井四郎兵衛湯場也	18屋：御本陣、庄屋久保平右衛門	18屋：御本陣、久保平右衛門宅	18屋：御宿主寺戸助左衛門	御本陣	御本陣寺戸助右衛門所(720)
	30河原		18泊：御本陣長井了意湯場也		19屋：御宿主真宗色壁寺	御本陣	御本陣色壁寺(733)
毛利	31深川			18泊：御本陣、庄ヤ坂井六右衛門			
	32瀬戸崎						
	33三隅						
	34三見						

注 01屋は行程第1日目の屋敷を、01泊は第1日日夜の宿泊を示す。
 Aでは21日目に、B～Dでは19日目に帰城している。
 ☆1：Noは山口県文書館毛利家文庫目録の五八絵図の分類番号である。
 ☆2：内蔵は延宝7～元禄9に岩国藩主であった吉川広記を指す。
 ☆3：勝之助は元禄9～正徳5に岩国藩主であった吉川広盛(ひろみち)を指す
 ☆4：甲斐守は承応2～宝永6に長府藩主であった毛利綱元を指す。
 ☆5：須广(万)村に記されるが、宮ノ原は同村内にあった。
 ☆6：湯玉に記されるが、湯玉は宇賀村内にあった。

休泊施設を記した可能性が高い。

更に、毛利文庫には数多くの毛利藩関係の絵図が所蔵されているが、その中には上述の史料や国廻り行程記に記された施設名と同じ標題を持つ絵図も含まれている。これらの絵図の表現方法や紙質を検討しながら、描かれた年代や目的等を考慮して用いれば、国廻り時に利用された施設の具体的な平面構成を知ることが出来る。

3. 国廻り時の休泊地、休泊施設の概要

表1に示される4回の国廻り記録からは、若干の欠落があるものの、昼食および宿泊の地名と利用された施設名とを知ることが出来る。1回でも休泊地となった所は34箇所を数え(表2)、これらを図1に描いた。

これらの休泊地は一律な性格を有していたのではない。政治的には、本藩である毛利藩と岩国、徳山、清末、長府の各支藩とに分けられる(表2、図1)。支藩内でも、居館城下である4集落とそれ以外に分けられ、また、奈古と宮ノ原は徳山藩の飛地にあった。本藩内でも、須佐と阿川は、前述のように永代家老家の在郷屋敷集落であった。このような地方制と併行して、本藩では藩内の統治のため藩域を宰判に分割し、各宰判の中心集落に勘場と称する役所を設け、郡奉行配下の代官を派遣していたが、山代本郷、三田尻等はこうした勘場集落であった。一方、交通の面からは、高森、船木等の山陽道宿駅集落とそれ以外の集落とが区別されよう。また、「湯場」の語が見られる深川は温泉地であった(図1)。

次いで、利用された施設を見ると、各回全20日程の行程の中で、昼食は屋外の「御腰掛所」でとる日もあり、昼食、宿泊に利用された施設は30例程になる。これらの施設名を表2 A～D欄に記した。A～C欄にはそれぞれ史料1～3の「道中之事」に相当する部分から、例えばC欄の宇賀の場合、「同屋御休宇賀御着御本陣被為入候」のように到着時に最初に標題的に用いられている名称(この例では「御本陣」)をまず記し、さらにその建築内容を具体的に知り得る言葉(この例では「庄屋市之允宅」)がある場合にはそれを記した。D欄には、史料6の「御宿附之事」に書かれる宿泊施設名を記した。

図1と表2とを併せてみると、萩から時計回りに一巡していた様子が理解される。

国廻り行程記を見ると、宗広時に休泊地となった30箇所すべてに御茶屋、御本陣、屋敷等、D欄に記される施設名に対応する書き込みが認められ、それらを表2 E欄に示した。この30箇所以外の地で御茶屋、本陣の類が記載されるのはわずか2例(*注3)のみであり、また、国廻り行程記に描かれている宮市集落には、当時すでに本陣として武士休泊に用いられていたと考えられる兄部家(文献2)が記されず、たとえ集落内に存在していても

国廻り時の休泊に用いられないものは記載しない方針であったと推測される。

最後に、絵図については、明らかに一連のものと考えられる(*注4)建物差図26枚が見出される。それらの標題の地名はすべて宗広時に休泊地となった30箇所に含まれ、また、標題の施設名はD欄もしくはE欄の、該当する26箇所の施設名に一致し、それを表F欄に記した(*注5)。従って、これら差図は寛保2年の国廻り時に利用した施設を描いたもので(*注6)、当初30箇所分すべてが存在していたものが、後に4枚散逸したものと判断される。

各差図は表現技法上の共通性が認められるが、描かれる範囲と表現精度の2点において差異が見られる。即ち、前者については、複数の敷地にわたって描くもの、ひとつの敷地全体を描くもの、敷地内の主要な建物のみを描くもの、建物の一部を描くもの等があり、後者については、柱の位置や部屋名さえ示されないものから、部屋名、部屋の広さの他、壁と建具の区別、建具の種類、かまどや臨時的な衝立・屏風の位置等を記入したものまで見られる。恐らく、国廻りに先立って利用が予定されている建物の絵図の提出を求めた際(*注7)、提出する側に範囲や精度に対する認識に違いがあり、一方、提出を受けた側ではそれらを共通の書式で清書した、という事情があったと思われる。

従って、例えば、厩・御駕籠部屋が描かれている差図は全体の約半数にとどまるが、半数だけの施設に必要であったとは考え難く、実際、差図に厩の描かれていない三田尻御茶屋には描かれている範囲外に厩があることが他の資料から知られ(文献1)、これらはすべての施設に設けられていたと考えるのが適当であろう。

欠落したと考えられる4箇所の内、花岡と船木の御茶屋については、この一連のものとは異なるが、それぞれ絵図があり(*注8)、また、小郡御茶屋にも他に2種類の絵図が遺されている(*注9)ので、これらも援用したい。区別のため、一連の26枚を差図と呼び、これらを花岡絵図、船木絵図、小郡絵図Ⅰ、Ⅱと呼ぶこととする。

表2を概観すると、休泊には①岩国、徳山等の支藩居館や須佐、阿川の永代家老家在郷屋敷、②三田尻、小郡等の御茶屋、③「庄屋所」あるいは「誰々所」と記されるような民家、④寺院が利用されたことが知られる。しかし、詳細に見ると、各施設は資料によって用いられている名称が異なる場合があり、また、「勘場」や「湯場」といった名称も散見される。さらに、街道宿駅集落の本陣がその本陣家の名前を用いて「誰々所」と③の形で表現されている可能性もあり、③は上層農家、有力町屋、街道宿駅の本陣等の様々な建築を含んでいるものと見られる。従って、具体的にどのような平面を有する施設が、

どのように利用され、何と呼ばれたか、という3者の関係を明らかにする必要が痛感される。

4. 差図に描かれた御茶屋の平面構成

表2において、御茶屋の語の下に〰を引いた(*注10)。計11の地名に該当するものがあり、表の地名欄には太字で示したが、これらの内で差図が遠る奈古、宮ノ原、山代本郷、志部前、三田尻、小郡、吉田の7箇所について、それぞれの原図写真、および、原図に見られる平面構成上主要な書き込みを写し入れて図化したものを図2~8に示した(*注11)。文献1においてすでに図6を紹介し、三田尻御茶屋を対象に、藩主等の居住機能を果たす必要がない場合は、玄関・式臺を備え家士の詰所でもあった番所部分、主たる儀礼行為空間としての御座間部分、および、台所部分を主要な構成要素とし、本門を入ってすぐの所に番所部分が、その奥に御座間部分が、そして、裏手に台所部分が配置されるのを原則とする、という結論が得られている。上記7箇所は当時こうした居住用には用いられておらず、この結論と比較して検討することが可能である。

以上の視点から7例の平面構成を分析すれば、まず、小郡御茶屋(図7)では、構成要素である3部分がそのまま中庭をめぐる形で3棟を形成し、こうした構成の典型を見ることが出来る。次いで、奈古(図2)、宮ノ原(図3)、山代本郷(図4)、吉田(図8)でも同様の構成が明確に読み取られる。最も規模の大きい三田尻の例(図6)では、番所部分と御座間部分との間に黒書院と御書院を持ち、また、記録所や御小姓部屋等が充実されているが、これら5例と共通の構成と言え、花岡絵図、船木絵図でも同様である。特に、奈古と宮ノ原は、左右反転した形ではあるが非常によく似た平面である点が興味深い。これに対し、志部前の例(図5)は、描かれる範囲や表現精度が他の6例と異なる点を考慮しても、これらとは異なる構成であったと判断せざるを得ない。

御座間部分がさらにどのような部屋から構成されていたかについてこの6例を見ると、いずれにも二之間以下を従えた広さ8畳の御座之間および御納戸が描かれ、花岡絵図、船木絵図においても同巧である。三田尻御茶屋の例では、これより後の時代になると御座間、御寝所、御納戸が同時に存在し、御寝所が寝室に、御納戸が物置に相当することが明らかにされている(文献1)が、これらの6つの図には御寝所が描かれず、図中の御納戸が寝室であるか、物置であるかは不明である。ただ、昼食時に利用されて浴室が記入されていない奈古、宮ノ原にも御納戸と書き込まれ、宮ノ原(図3)では御座間から離れた所にあり、宿泊時の寝室としての使用を考慮した部屋とは考え難い。また、山代本郷(図4)の細長い部

屋形状や船木絵図の3畳という広さも、寝室には相応しいとは言い難い。

一方、これら6例において建物へ入る動線を検討すると、宮ノ原(図3)では、街道に面する本門を入ると中門を経て御座之間入側に付せられた御駕臺に導かれ、番所棟に付属する内玄関には達することが出来ない。奈古(図2)では、本門から内式臺へも玄関へも、また、堀中門を経て御座之間入側に付せられた御駕籠臺へも達することが出来るが、駕籠臺が設けられていることから、宮ノ原の例に同じく、ここから建物に入ったと考えられる。こうした動線は両例における御駕(籠)部屋の位置に符合し、さらには、宮市宿本陣兄部家の例(文献2)と共通している。一方、山代本郷、三田尻、小郡、吉田の4例(図4、6~8)では明確な御駕籠台の表現がされておらず、主たる門からは番所棟の式台へも、堀中門を経て御座間が面する庭へも行くことが可能である。花岡絵図、船木絵図においても同様であるが、花岡では庭への堀中門に「御本門」と書き込まれている(*注12)。

さらに、奈古、宮ノ原と山代本郷、三田尻、小郡、吉田とは、前者が支藩徳山藩内の集落、後者が本藩内の勘場集落という相違点がある。このことは図4、6、7、8において敷地内の構成に反映している。即ち、山代本郷(図4)では御茶屋と同一敷地内に勘場、御銀子方木屋等が設けられ、勘場とは折廻し釣屋で結合されている。三田尻では図6の時代に御茶屋が勘場に隣接し、天保15年以後は御茶屋敷地内に勘場が設けられていたこと(文献1)が、また、小郡でも小郡絵図Iから図7の時代に前後して敷地内に勘場が設けられていたこと(*注13)が知られる。また、吉田では図8に代官役所と書き込まれた1棟があり、内容は不詳であるが、やはりこうした統治に関連する機能を敷地内に持っていたことをうかがわせる。花岡、船木も同様に本藩内の勘場集落であり、絵図では敷地内に勘場等は描かれていないが、いずれも、勘場は御茶屋に隣接して設けられていた(*注14)。

最後に、志部前に関しては、史料4の志部前の箇所に「御本陣民屋也、御座之間と二之間ハ此度新規ニ普請出来候」とあり、図4中の「新規」「是有県里之分」とある書き込みに一致する。従って、この建物は本来民家として使われていた建物に、毛利藩主の御座間用に新たに2室構成の書院座敷を付加したものであることが判明し、他の6例とは明らかに異なる平面となることが理解される。従って、表2A~C欄で志部前の所に「庄屋所」「民屋」等と表現されるものと同一であるか、あるいは、異なる場合にも建築的には大差ないと言え、逆に、何故史料6の「御宿附之事」において「茶屋」とされたかが疑問となってこよう。

また、史料4には「御本門より里内御成門有之」とあり、書院座敷へ向けての動線が別に設けられていたことをう

図2 奈古御茶屋差図

図3 宮ノ原御茶屋差図

図4 山代本郷御茶屋差図

図5 志部前御本陣差図

- 凡例
座：御座之間	土：土地	手：御手洗所、御手洗部屋
二：二之間、御次之間	湯：御湯殿	駕：御駕（籠）部屋
三：三之間	玄：玄関	本：（御）本門
納：御納戸	式：式台	中：中門、堀中門
記：記録所	坪：坪ノ内	番：番所

図6 三田尻御茶屋差図

図7 小郡御茶屋差図

図8 吉田御茶屋差図

かがわせるが、上の6例と同様に必要とされると考えられる御納戸、番所部分、台所部分等がどのように設けられていたかは、差図、文献からは知ることが出来ない。

5. 御茶屋の利用状況

各休泊地において4回の国廻り時にどのような名称の施設が利用されたかを表2 A～D欄によって検討すると、毎回利用された御茶屋として奈古、三田尻、小郡、船木、吉田の5例が挙げられ、吉広時の史料2で施設名が記されていないものの花岡も同様と考えられる。一方、他の5箇所では「御茶屋」以外の語が見られる。この内、宮ノ原と山代本郷では、両所の御茶屋が図3、4に見られるように民家等とは明らかに異なる構成であること、全4回のうち途中から御茶屋の語が使われていることから、4回の国廻りが行われている間に建設されたのではないかと予想される。また、表に挙げられた34箇所の内、他の資料で御茶屋の存在が知られるのに国廻り時に御茶屋を休泊に用いていない例は見られず（*注15）、御茶屋はこうした移動時の休泊施設としてまず第一に利用されるものであったと言える。

表2から、御茶屋以外に宮ノ原では庄屋宅が、山代本郷では勘場が利用されていることが分る。山代本郷には庄屋等の上層民家が当然あったはずであり、勘場はかかる休泊用の施設として民家よりも優先的に利用されたと考えられるが、一方、同じく勘場集落であった河原では庄屋久保家が利用され、一概には言えない。また、深川村においては勘場のあった正明市と、温泉地としての深川湯本とは離れていた。

志部前では、先に述べたように本来民家であるものを「茶屋」と称して利用していたと考えられる。また、表2 A～D欄を見る限り、川棚では御茶屋と社寺が、宇賀では御茶屋と民家が利用されたように見えるが、御茶屋がどのような建築であったかが明記されず、志部前の例のように民家等と実質的な差のないものである可能性もあり、従って、ここに言う御茶屋の建築実態についてさらに詳細な検討が必要となって来る。

6. 御茶屋の名称の用いられ方

同一の施設を指すと考えられる表2 D～F欄において、資料によって御茶屋の語が用いられる場合とそうでない場合があるものが見られ、名称の用い方の点でも一様ではなかったことが推察される。D～Fのどの資料においても御茶屋と称されるのは山代本郷、三田尻、小郡、吉田の4例であり、花岡、船木の差図が遺されていれば、利用状況や両所の御茶屋絵図等から推して、やはり御茶屋と題されていたと考えられる。

奈古、宮ノ原の例では、国廻り行程記にのみ御茶屋の語が見られない。これは徳山藩内の施設であるため、本藩の絵図方が描く中で本藩のものと区別したのではないかと考えられる。

これとは逆に、同じく支藩内にあっても、志部前、川棚、宇賀の場合は、表中各々1度しか御茶屋もしくは茶屋の語が見られない。川棚では史料5に「川棚御着、御茶屋江被為入候事、但御本陣妙晴寺と申寺ニ而候へ共、長府より之御馳走場ニ付御茶屋と唱候事」とあって、D欄に示される史料6の「御宿附之事」に記される名称と異なり、川棚を領有する支藩長府藩が本藩毛利藩の藩主に馳走する場所であるという性格の故に、実際の建築物としては寺院である妙晴寺を御茶屋と称していた。史料5には続いて長府藩家老三沢帯刀以下3名を挙げ「右為御馳走人被差出候」と記されている。従って、吉元時の記録として「御本陣甲斐守様御茶屋」（表2 C欄）とあるのもわざわざ長府藩主の名を冠していることから推して、宗広時と同様に本来は別の用途の建築を御茶屋と称していた可能性が高い。

宇賀においても、史料5に「御屋休宇賀江四半時過御着、御茶屋江被為入候事、但御本陣庄屋ニ而候へ共、長府より之御馳走場ニ而御茶屋と唱候事」とあり、同様の理由から本来庄屋の居家であるものを御茶屋と称している。従って、やはり吉元時の「庄屋市之允宅」（表2 C欄）と同一のものを指すと考えられる。

さらに、川棚、宇賀の両所においては、吉就時、吉広時にも「長府より御馳走」と記され（史料1、2）、施設の名称、建築形態は不明なものの同様の性格を持つものであったと推測される。

これらの例を考慮すれば、志部前の場合も、史料4には御茶屋の語は全く用いられていないが、そこが岩国藩内であり、志部前の所に「為御馳走人家老吉川式部被差出、御本陣相詰其外役人被差出候」（史料4）とあることから、宇賀と同様の理由で、史料6の「御宿附之事」の中で、民家を「茶屋」と呼んだと推定される。

以上より、御茶屋独自の構成を有し御茶屋の呼称が定着している奈古、宮ノ原、山代本郷、花岡、三田尻、小郡、船木、吉田の例と、こうした御茶屋を持たない集落において、本来は民家や寺院であるものを支藩側が本藩藩主を馳走する場所の故に御茶屋と呼び（*注16）、御茶屋以外の呼称を用いられることも多い志部前、川棚、宇賀の例とに分けられる。しかも、後者の場合、御茶屋と呼ぶ場合とそうでない場合とを区別する法則性は見出し難い。

7. 結び

図面類と文献史料を中心に、毛利藩主国廻り時に利用

された休泊施設の内御茶屋と呼ばれるものを対象に検討してきたが、それらは

〔1〕番所部分、御座間部分、台所部分を主要な要素とする御茶屋独自の構成を持つもので、御茶屋以外の何物でもなく、国廻り時の休泊に際してまず第一に利用され、安定的に御茶屋と呼ばれるもの

〔2〕支藩内にあり、本来寺院あるいは民家であってそうした建築形態を有するものを、支藩側が家老等を馳走人として派遣し本藩藩主に馳走する場所として臨時的に使用し、その故に御茶屋と称する一方、御茶屋以外の呼称を用いられることも多いもの……志部前、川棚、宇賀に分けられ、前者はさらに

1) 本藩内の勘場集落にあり、勘場に代表される支配機能との関連をうかがわせるもの

……山代本郷、花岡、三田尻、小郡、船木、吉田

2) 支藩内にあり、御座間入側に付せられた御駕籠台を持つもの……奈古、宮ノ原

に分けられる。

以上より、同様に藩主休泊に用いられた御茶屋と言っても、その名称の用い方は一様ではなく、また、建築形態にも様々なものが見られ、それらが本藩一支藩関係や本藩内の領内統治制度と関連しながら存在していた状況が理解される。

表2に見られるように御茶屋以外にも国廻り時に利用された施設は数多くあり、これらを対象にその2以降で同様の検討を行いたい。今回、実質的に民家や社寺であった〔2〕に属する建築の実態は、差図も少なく十分に解明されたとは言い難く、また、こうした多様な形態の建築がいかに用いられて藩主の休泊という共通する機能を果たし得たかの解明のためにも、これらの検討が待たれる。一方、毛利藩内には国廻り時に利用されたもの以外にも数多くの御茶屋が存在しており、本稿を基に他の御茶屋をも含めた全体的な検討も同時に必要となろう。

謝辞

本稿をまとめるに当たり、史料・絵図に関して山口県文書館の協力を得た。付記して謝意を表したい。

注

- 1) 松野尾章行：『皆山集』明治11年（高知県立図書館蔵）によれば、天保14年に土佐藩を襲封した山内豊熙は弘化2年に藩西部を同4年に東部を巡視している。
- 2) 2代綱広については慶安4年（1651）襲封、万治元年（1658）初入国し、延宝6年（1678）病をもって在府し爾後帰国せずとあり（文献7）、万治元年～延宝6年の間に国廻りの記録は見られない。万治2年に郡奉行諸部を巡視すとあり（同上）、あるいは、病弱な藩主に代わって郡奉行が代行したか、とも考えられる。
- 3) 岩国高森間の玖珂本郷に「岩国茶屋」「本陣」が、三見萩間の玉江浦に「上ノ御茶屋」が描かれている。玖珂本郷は岩国藩領にあり史料4の記述範囲に含まれているが、何も触れられていない。玉江浦は本藩内にあり、表1に示される如く日記風記述を欠き、詳細は不明である。
- 4) 紙質、書き込みの筆跡が共通する他、御座間に当る部屋にの

み畳目を描き、ここに炉がある場合はさらに朱で書き入れる、という表現方法も共通する。縮尺は大部分が約1/100であるが、1/60（志部前、須佐）、1/75（江崎、鹿野、赤間関）、1/120（徳山、清米）のものもある。

- 5) 差図標題の内、先頭の地名と末尾の「差図」を省いてF欄に記した。最初の例では「奈古御茶屋差図」が正しい標題である。
- 6) 他の3回では史料1～3に記される施設に2枚の差図以外のものがあり、また、江崎の教導寺に関して『防長風土往還案』（山口県文書館蔵）に、元禄9年以後国廻り時に殿様に2度利用されたことから、1、2代藩主時のものでないことも確認される。また、岩国、長府においては史料4、5に載せられる図が差図と一致している。
- 7) 史料7によれば毛利宮内は「去夏田屋之差図山内縫殿方江差出……」とある。山内縫殿は元文3～延享元に当職（家老に当る）の地位にあった。
- 8) 都濃郡花岡御茶屋差図（毛利文庫目録、五八絵図、661）、船木御泊御茶屋差図（同、707）
- 9) 小郡御茶屋差図（同、697）、小郡御泊御茶屋差図（同、698）
- 10) D欄志部前には「御」がなく「茶屋」とだけ記されるが、これも含めた。
- 11) 図2～8の図は縮尺を同一にして描いてある。これら7枚の差図の表現範囲を見ると、図2、3、8には、いずれも下敷敷地外に厩、腰掛、米蔵、薪小屋等の付属屋が併せて描かれ（ここでは図、写真共に省略した）、志部前（図5）では敷地形状や敷地内の様子が全く描かれていない。吉田（図8）では写真に見えている敷地外の辻番所2棟を図では省略した。表現精度の点では、どの図にも建具類の記入はなく、部屋名、柱形、縁の板目、かまど等が記入されるものが多いが、やはり志部前では柱形の一部を除いてこうした記入を欠き、三田尻（図6）でも板目、かまどが描かれていない。また、書き込み文字の点では、「八畳」等広さを表す畳数が主棟の大部分の部屋に書き入れられているもの（図4、7）と御座間を中心とした1～3室にのみ書き入れられているもの（他の5図）とがあるが、図では省略した。
- 12) これら6例の御茶屋を宗広が利用した時の御座間等の用いられ方、および、動線の状況は、6例すべてが「道中之事」に相当する記述を欠く本藩内、あるいは、徳山藩内（表1）にあり、詳細は不明である。また、史料1～3においても、これらに関する記述は見られない。
- 13) 小郡絵図1（同、967）に描かれる主屋は図7のそれに一致しているが、図7で北側隅の敷地境界線に沿って鍵型に描かれる付属屋に代わって、「勘場」の建物が描かれている。
- 14) 国廻り行程記からこうした様子がうかがわれ、また、花岡絵図と都濃郡花岡御泊勘場差図（同、662）との関係もこれを裏づける。
- 15) 藩政期全体で見れば、深川湯本に御茶屋があったことが知られているが、宗広国廻り時を含む享保12年（1727）～宝暦3年（1753）の地誌である『防長地下上申』では、例えば山代本郷の項には「御茶屋老ヶ所」と記される等、差図で存在の知られる御茶屋の記述が見られるのに対し、深川湯本の項にはこうした記述がなく、まだ建設されていなかったものと判断される。
- 16) 本稿では宿泊、昼食に利用された御茶屋のみに対象を限ったが、宿泊と昼食との間に利用された御茶屋として、吉元時の徳山三田尻間の福川、宗広時の岩国高森間の金坂の2例が見られる。前者は徳山藩領で「福川御茶屋江被為入……但し御本陣は百姓家……御座間迄新規之普請」（史料3）とあり、後者は岩国藩領の山陽道宿駅柱野にあり「金坂江左殿より里御馳走御茶屋被相調候」（史料4、左京殿は岩国藩主吉川経永）とあり、いずれもこれらに共通するものと考えられる。

参考文献

- 1) 拙稿「毛利藩における三田尻御茶屋について」、日本建築学会論文報告集第444号、pp.127～137、1993.2
- 2) 拙稿「毛利藩における宮市宿本陣兄部家について」、日本建築学会論文報告集第454号、pp.173～180、1993.12
- 3) 大熊喜邦：『東海道宿驛と其の本陣の研究』、丸善、1942
- 4) 中島義一：「徳川將軍家御殿の歴史地理的考察」第1～3報（『駒沢地理』14号、pp.177～197、1978.3、『歴史地理学会報』97号、pp.10～18、1978.5、『駒沢地理』15号、pp.53～63、1978.3）
- 5) 岡田悟ほか1名：「仙台藩家臣登米伊達氏が仙台上府時に利用した休泊施設について」その1、2、日本建築学会東北支部研究報告集第47号、pp.43～50、1986.3
- 6) 川村博忠：「近世防長の絵地図の世界」（『絵図で見る防長の町と村』山口県文書館、pp.209～211、1989.10）
- 7) 『増補改訂山口県文化史年表』、山口県、1968.3
（1994年3月25日原稿受理、1994年8月25日採用決定）